

## 乳児期における愛着の形成とコンピテンスについて

大 瀧 ミドリ

(昭和56年9月30日受理)

### Infant-Mother Attachment and Competence

Midori OTAKI

(Received September 30, 1981)

#### 問 題

先に、理論的概観において詳述したように、愛着は、その理論的立場の違いにより、非常に多くの定義がなされている。本研究では、Sroufe と Waters の主張する organizational construct という考え方をとる。彼らは、愛着を特定の行動と定義するのではなく、子どもの置かれている場の状況に多分に関連して、その場の状況や文脈とのからみの中で変化する行動の organization としてとらえている。本研究でも愛着を行動の organization としてとらえる。

また、コンピテンスについても非常に多くの定義がなされている。本研究では、愛着と同様に organization の質の問題としてコンピテンスをとらえて行く。つまり、子ども自身の発達を促すように、あるいはその場にうまく適応できるように行動を organize し、mobilize することをコンピテンスと考えるわけである。このような観点から立つと、愛着とは、子どもが safety, security, survival を得るために必要なものであるから、愛着はまさにコンピテンスの subset と見なすことが可能となる。このような愛着とコンピテンスの関係を肯定する研究として、Matas, Arend and Sroufe の研究があげられる。彼らは12~18ヶ月児を対象とする研究の中で、対象児に与えられる effectively support (attachment relationship) はコンピテンスの1つの指標である探索行動を活発化し、その結果として対象児の物理的、社会的環境理解を促すことを見いだしている。

このように、愛着とコンピテンスの間に positive な関

係が存在するのであれば、愛着の形成に関連する母親と子どもの関係とコンピテンスの発達を促す母親と子どもの関係の間にも、当然、positive な関係が仮定される。

それ故、本研究では、子どもが母親に対して形成する愛着の質的差異と親子関係、コンピテンスの発達と親子関係、愛着の質的差異とコンピテンスの発達、愛着の形成に関連する親子関係とコンピテンスの発達に關与する親子関係相互の関連等について明らかにしようとするものである。今回は、愛着の質的差異との関連について報告する。

(測度について)

愛着の質的差異を測定するために、Ainsworth らの strange situation の手法を用いる。これは、Ainsworth と Witing が考案したものである。1才児を少しづつストレスの増す状況 (strange situation) におき、1才児が、どのような反応を示すかをみるものである。1才児が strange situation で示す反応が、母親に対してどのような愛着を形成しているかを決定する手掛かりとされている。strange situation は、対象児にとって初めての部屋、初めて出会う人、母親との短い分離、その後の母親との再会等々のいくつかの統制された場面で構成されている。これらの場面は、多分に子どもが日常生活場面で体験するもので構成されている。

子どもの行動はすべて記録され、特定の行動について7段階評定がなされる。評定の結果に基づいて対象児は、A (Avoidant baby), B (Secure baby), C (Ambivalent baby) の3 group に分類される。Aには2つの subgroup が、Bには4つの subgroup が、Cには2つの subgroup が含まれる。

Waters は、strange situation の分類の安定性につい

て、同一対象児の12ヶ月時と18ヶ月時の分類結果の一致度を見ている。その結果、51名中48名のものは、両月令で同じ group に分類され、その48名中30名のものは、subgroup でも同じ group に分類された。そして48名中残り18名のものは、分類された subgroup は異なっていたものの両月令における相関は0.01水準で有意であったという。この結果から strange situation における分類が高い安定性を示すことを主張している。また Blehar も2才時と3才時の行動評定の一致は、0.88~0.98と非常に安定していることを示している。

分類における評定者間の一致度については、Waters は A : 91%, B : 94%, C : 85% と、やはり信頼性の高いことを示している。また Sroufe と Waters は、12ヶ月時における評定者間の一致度は A, B, C について92%, subgroup について84%, 18ヶ月時では、A, B, C が88%, subgroup は81%であったと報告している。

Ainsworth らは strange situation を用いて行なわれた多くの研究を概観し、それらの研究をつぎの5つに分類して、strange situation の有効性について検討している。

1) 子どもが母親に対して形成する愛着の質的差異を従属変数とし、先行要因との関係をみようとする研究。

2) 愛着あるいは母子関係を独立変数とみなし、共起行動である対象児の他の行動との関係をみようとする研究。

3) 愛着あるいは母子関係を独立変数とみなし、後続変数である対象児の行動との関係をみようとする研究。

4) strange situation での対象児の行動と他の場面での行動を比較する研究。

5) strange situation の分類の安定性を見ようとする研究。

その結果、これらのいずれの研究においても strange situation の有効性が示されているとして、strange situation が愛着の質を測定する方法として妥当なものであることを指摘している。

本研究でも子どもが母親に対して形成している愛着の質的差異を測定する尺度として、この strange situation を用いる。

コンピテンスを測定するための Bell and Pairs テスト、物理的・社会的養育環境を測定するための HOME (Home Observation for Measurement of the Environment), 母親の養育行動を評定する Ainsworth 評定尺度

について、尺度としての妥当性および信頼性については、前報に報告したので、今回は省略する。

(仮説)

本研究では、つぎの仮説について検討する。

1. HOME で測られる 物理的・社会的環境条件と子どもが安定した愛着を母親に対して形成することとの間にはつぎのような関係が仮定される。

まず、母親が子どもと持つ身体的な接触の頻度や量は、母親の子どもへのかかわり行動 (subscale 5) と大きな関連をもつであろう。また、子どもの欲求をうまくとり込み、適確な反応を行なうことのできる母親は、子どもの行動を直接統制するような制限的・抑制的なしつけの方法はとらないであろう (subscale 2)。さらに、感受性の豊かな母親は、子どもへの情緒的・言語的にかかわりあい (subscale 1) をうまく展開するであろう。そしてまた、母親が子どものもつリズムにうまく合わせることができるときには、子どもは人との間に信頼を確立することができるであろう。さらに、母親が子どもの生活空間を適切に整備できる能力 (subscale 3, 4, 6) をもつ場合には、子どもは対物行動を介して自信を獲得するであろう。

このような関係が仮定されるならば、愛着の質的差異を示す A, B, C と HOME の得点の間には、つぎのような関係が仮定される。

subscal 1 : B > C > A

2 : B > C > A

3 : B > C > A

4 : B > A > C

5 : B > C > A

6 : B > A > C

これらの仮説は、Ainsworth らの研究から考えられたものである。彼らは、10~12ヶ月時の継続研究の中で、家庭での母親の行動観察の結果と strange situation での子どもの反応との関連について、つぎのような関係を見いだしている。

Bに分類された子どもの母親は、もっとも情緒的に豊かで、感受性が高く、協調的かつ適切なかかわり合いを子どもと持つことを見いだしている。また、Aに分類された子どもの母親は、BやCに分類された子どもの母親よりも、干渉的で、感受性が低く、拒否的かつ無関心であることが多く、子どもに対して統制的なかかわり合いが多い。母親自身の特徴としては、完全主義者で、表情が余り豊かでないことが見いだされている。Cに分類さ

れた子どもの母親は、A、Bに分類された子どもの母親よりも子どもの扱い方がうまくない。つまり、日常生活場面で、子どもに行動的なレベルで直接、制限や統制を加える傾向が強く、Bに分類された子どもの母親よりも、感受性が低く、干渉的・拒否的・無関心である傾向がある。

2. 安定した愛着を母親に対して形成しているものとそうでないもののコンピテンスの発達には、有意差が認められるであろう。そこでコンピテンスの測度として用いる Bell and Pairs テスト得点には、つぎのような関係が仮定される。

Bell への探索 :  $B \cdot A > C$

Novel object の探索 < Bell の探索 :  $A > B > C$

Novel object の探索 > Bell の探索 :  $B > A > C$

この仮説は、Rubensteinの結果に基づいて仮定されたものである。彼女は、母親が子どもに示す関心の深さと、子どもの Bell を探索すること、さらに、novel object に示す関心の有無とが、直接的な関連を示すことを見だしている。Connell は Habituation テストの得点と愛着との関連について、安定した愛着を形成している子どもは、早く habituation を示すのに対して、Aに分類される子どもは、探索行動は活発であるけれども habituation が遅いことを見だしている。また、Cに分類される子どもは、すべてに消極的で、何ごとに対しても用心深いために探索行動が不活発となることを見だしている。

3. 仮説1で見たように、子どもが安定した愛着を母親に対して形成するためには、母親がどのように子どもとかかわるかが、大きな意味をもつであろうことが考え

られる。そこで母親の養育態度との間には、つぎのような関係が仮定されるであろう。

尺度 1. Sensitivity :  $B > C > A$

2. Acceptance :  $B > C > A$

3. Cooperation :  $B > C > A$

4. Accessibility :  $B > C > A$

これらの仮説は、Ainsworth らの結果に基づいて考えられたものである。すなわち、Bに分類された子どもの母親は、他に分類された子どもの母親よりも子どもの communication や signal に高い関心を配っている。Aに分類された子どもの母親は、子どもに対して拒否的な感情を持っており、AとCに分類された子どもの母親は、子どもに対して母親の価値をおしつける傾向があり、子どもの発する communication や signal に対して無関心であることを見だしている。

### 研究方法

被験者：米国人の12ヶ月児41名とその母親である。なお、詳細は前報に報告したので省略する。

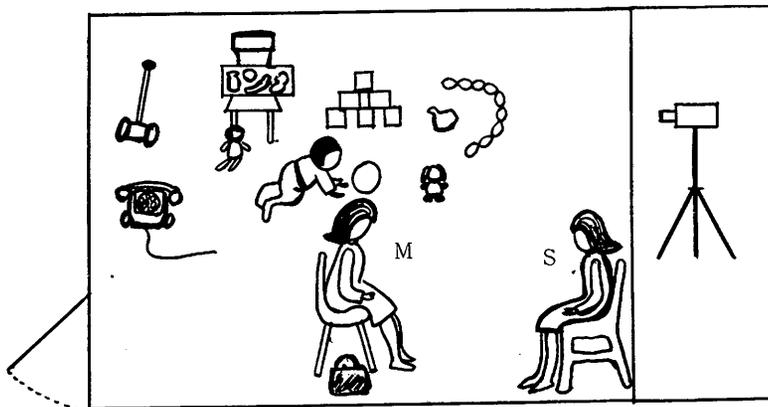
手続：本研究に関する資料は、家庭での母子の行動観察および実験室での母子の行動観察によって入手する。

#### 1) 家庭

約2時間に亘る家庭訪問を行ない、つぎの測度を施行する。

a) Caldwell らによる HOME の測度を用いて、家庭の物理的・社会的環境について評定する。

b) Rubenstein による Bell and Pairs テストを用いて、子どもの探索行動および novel object に対する興



(Adapted from Ainsworth et al. 1974. p. 34)

FIG. 1. SKETCH OF THE PHYSICAL ARRANGEMENTS OF THE STRANGE SITUATION.

味・関心等を測定する。これはコンピテンスの測度として使用する。

c) Ainsworth 評定尺度により母親の養育行動を評定する。

d) 質問紙により家庭状況等について調査する。

## 2. 実験室

実験室内の様子は、Fig. 1 に示してある。実験室内には子どもの興味を誘発する玩具として、積木、玩具の電話、パズル、ビーズブロック、人形、カタカタ、ボール、プラスチック製の動物2種（犬とカバ）、子ども用の椅子が用意されている。部屋のすみの方には母親用の椅子と stranger 用の椅子が用意されている。母親用の椅子の上には雑誌が置いてある。

室内の様子は、マジックミラーを通して VTR にすべて録画する。

実験場面は、TABLE 1 に示されるように 8 つの episode から構成されている。episode が進むにしたがって、子どもが母子分離にもなる不安を高めて行くように場面構成がなされている。

Episode 1. 実験者が手続について母親に説明する場

面である。大学に來所してもらう日を決める段階で、母親には予め実験手続を書いたメモを渡してある。この場面は、手続を確認するとともに控室から実験室への移動の時間として使用される。

Episode 2. 母子が一緒に実験室に入室する。子どもは玩具のところへ、母親は所定の椅子に行き、手続に従い雑誌を読む。この母親の役割は、母親は何か自分の仕事をしていて、子どもに対して関心を配っていないということ子どもに知らせるとともに、母親から子どもになされるかわり合いを極力統制する意図で与えられている。

Episode 3. 母子にとって全く初対面である若い女性が stranger として入室する。入室1分後、stranger は母親に話しかけ、さらに入室2分後、stranger は子どものそばに近づき、話しかけたり、玩具を差し出すなどしながら子どもとかかる。stranger の入室によって生じる子どもの不安を、母親が stranger と話している場面を子どもに示すことによって多少減少させるとともに、stranger が子どもとかかわることで、子どもの注意を母親から引き離そうとする意図をもって場面構成がなさ

TABLE 1  
SUMMARY OF STRANGE SITUATION PROCEDURE

Episodes	Participants	Duration	Behaviour highlighted be episode
1	Mother, baby, experimenter	30 sec approx.	(Introductory)
2	Mother, baby	3 min	Exploration of strange environment with mother present
3	Stranger, mother, baby	3 min	Response to stranger with mother present
4	Stranger, baby	3 min*	Response to separation with stranger present
5	Mother, baby	Variable	Response to reunion with the mother
6	Baby	3 min*	Response to separation when left alone
7	Stranger, baby	3 min*	Response to continuing separation, and to stranger after being left alone
8	Mother, baby	Variable	Response to second reunion with mother

\* Episode was curtailed if the baby was highly distressed.  
from Ainsworth et al. 1971 p. 20

れている。

Episode 4. 母親はバックを椅子の上に置き、できるだけ子どもに気づかれずに退室する。母親が退室している間、子どもは stranger とともに過ごす。母親がバックを置いて退室する意味は、母親が再び戻ってくることを子どもに気づかせることにある。

Episode 5. 母親はドアの外から大きな声で2・3回子どもの名前を呼んでから入室する。入室する際、ドアを開け、入口のところで少しの間立ち止まってから入室する。ドアの外で子どもの名前を呼ぶのは、母親が戻って来たことを子どもに知らせるとともに、もし stranger が子どもをだっこしている場合には、「子どもを下におろして自由な状態にせよ。」という合図も兼ねている。これは、子どもが母親に再会した時に、自由な反応ができるようにとの配慮でなされているものである。入室後、ドアのところで立ち止まるのは、母親から子どもへの働きかけを統制し、子どもの反応をとらえるためになされている。

もちろん、この後の母親の行動には何も特別な統制は加えられていない。子どもが泣くなどの不安状態があれば、家庭で接するように、自由に子どもと接することが許されている。しかし、もし子どもが何らの不安も示していないならば、母親は専用の椅子に戻り、雑誌を読む役割をとる。stranger は母親と入れ替わりに退室する。

Episode 6. 母親は再びバックを椅子の上に残して、

入口のところに行き、“バイバイ”と子どもに声をかけてから退室する。これは、子どもによっては、玩具への興味・関心が強く、母親の退室に気づかないものもあるので、声をかけることで母親の退室を明確に子どもに知らせる意図でなされるものである。母親が退室した後、子どもは一人で実験室に残される。

Episode 7. stranger が、ドアの外から大きな声で2・3回子どもの名前を呼び、入室する。入口のところで少の間立ち止まり、子どもが stranger にどのように反応するかを見る。もし、子どもが不安に陥っている場合には、だっこするなどして子どもの気持を静めるように働きかける。

Episode 8. 母親は、ドアの外から大きな声で子どもの名前を呼び、入室し、入口のところで少し立ち止まる。Episode 5. と同様に子どもの状態に合わせて自由にふるまうことが許されている。

Episode 8 が終了後、実験者と stranger が一緒に実験室に入室し、子どもが十分に満足した状態になるまで母親と話したり、子どもとかかわる。これは、子どもの不快体験を消去するとともに、子どもの玩具への興味を十分に満してやる目的で行なう。

実験中の時間の経過は、実験者がマジックミラーの壁を軽くたたいて、母親と stranger に知らせる。また、実験室から退室した母親は、隣室からマジックミラーを通して実験室の状況を見ることが許されている。もし、

TABLE 2  
SUMMARY OF STRANGE SITUATION CLASSIFICATIONS

CLASSIFICATION CRITERIA (from Reunion Episodes 5 and 8)*						
CLASSIFICATION	DESCRIPTOR	Proximity Seeking	Contact Maintaining	Proximity Avoiding	Contact Resisting	Crying
A (2 subgroups).	“Avoidant”	Low	Low	High	Low	Low (preseparation), high or low (separation), low (reunion)
B (4 subgroups).	“Secure”	High	High (if distressed)	Low	Low	Low (preseparation), high or low (separation), low (reunion)
C (2 subgroups).	“Ambivalent”	High	High (often pre-separation)	Low	High	Occasionally (preseparation), high (separation), moderate to high (reunion)

\* Typical of the group as a whole ; subgroups differ in nonreunion episodes and to some extent in reunion behavior. See Ainsworth et al. (1978) for detailed classification instructions. from Waters 1978. p. 487.

母親が必要と認めた場合には、いつでも実験時間の短縮あるいは中止をすることができると伝えてある。しかし、どの母親からもそのような申し入れはなされていない。

実験終了後、VTRを反復視聴することにより、子どもの行動評定を行なう。今回は、短い母子分離を経験した後の母子の再会場面である Episode 5. と 8 における子どもの行動について、7段階評定を行なう。評定結果に基づいて、secure baby (Bを記す)、avoidant baby (Aと記す)、ambivalent baby (Cと記す)に分類する (TABLE 2 参照)。

評定対象となる子どもの行動はつぎのものである。

#### 1) Proximity Seeking (PS)

これは、母親との身体的な接触を得ようとして、子どもの方からははいはいをするなどして、積極的に近づこうとする行動の強さ・活発さについて評定する。

#### 2) Contact Maintaining (CM)

母親との身体的な接触を維持しようとする目的でなされる努力の強さ・固執性の程度についてみるもので、具体的には母親が一度だっこした子どもを下におろそうとする時に見られる、泣き、ぐずり、しがみつきの行動について評定する。

#### 3) Proximity and Interaction Avoiding (PA)

母親の方からはほほえみかけるなど、母親の方から子どもとの interaction をもとうとしてなされる働きかけに対して、顔をそむける、視線をそらす、あるいは母親が子どもの方に近づくと顔をふせる、うしろ向きになるなどして、要するに母親との関係を断とうとする行動の強さ・固執性などについて評定する。

#### 4) Contact Resisting (CR)

これは先にみた PS, CM の逆の行動についてみるものである。具体的には、母親が子どもをだっこしようとするとその手を押しやる、あるいはだっこした時に体を硬直させる、むずかる、かんしゃくを起すなど、要するに、母親との身体的接触を拒否する行動であって、その行動には怒りの感情が付随していることが明らかな場合である。

#### 5) Distance Interaction (DI)

子どもの方からはほほえみかける、発声する、身振りをする、ものを差しだすなどの行為によって、親との母 interaction をもとうとする、その積極性について評定する。

A, B, C の各 group の行動特徴はつぎのとおりである。

#### A (Avoidant baby)

再入室して来た母親に対して、子どもの方から笑顔を

送る、子どもの方から積極的に母親のところに近づくなど、いわゆる DI, PS などに含まれる行動はほとんど認められない子どもである。また母親がだっこした時にも、母親にびったりと体をよせる行動が認められず、母親がだっこした後、直ぐに下におろしても、特に母親との接触を持続しようとする行動が認められない。母親が退室し、一人で実験室に残されてもほとんど泣くことがない。仮りに泣いたとしても、stranger が入室すると泣き止むというように、母親の存在の有無と子どもの不安とが、直接結びついていないのがこの group の特徴である。外見的には、母親から自立して、よく遊べる子どもという印象を与える子どもである。この group は、A<sub>1</sub>, A<sub>2</sub> の subgroup からなっている。

#### B (Secure baby)

再入室して来た母親に対して、子どもの方から積極的に、接近・接触・interaction をもとうとする行動が顕著に認められる。また母親にだっこされた後、充分に気持が落ち着かないうちに下におろされると、泣いたり、しがみついたりして、母親との接触を持続しようとする行動が顕著に認められる。母親と stranger の区別は、完全に出来ていて stranger が在室することで、子どもの不安が解消することはほとんどない。外見的には、泣きと笑いのメリハリが非常にはっきりしているという印象を与える子どもである。この group は B<sub>1</sub>, B<sub>2</sub>, B<sub>3</sub>, B<sub>4</sub> の subgroup からなっている。

#### C (Ambivalent baby)

この group に入る子どもは、再入室して来た母親に近づきたいという行動を示すが、自らの力で積極的に近づき、接触しようとする行動は認められない。母親の方から子どもの方に近づき、接触を持とうとすると一層激しく泣く、母親の方に差し出していた手をひっこめる、顔を床に押しつけるほど、あたかも母親の働きかけを拒否するかのような行動を示すというように、母親に対して ambivalent な行動を示すのが、この group の特徴である。外見的には、母親に対して腹を立てている、怒っているという印象を与えたとともに、いつまでも泣きやまず、非常によく泣く子どもという印象を与える子どもである。この group は C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub> の subgroup からなっている。

分類における信頼性については、筆者と米国人がそれぞれ独立に全被験者について分類した後、分類の一致度についてみた。A, B, C の一致度は94%、subgroup の

一致度は89%であった。

結果

TABLE 3  
STRANGE SITUATION CLASSIFICATIONS (N=39)

Subcategories	Number	Major Classification	Regrouping
A <sub>1</sub>	1	7	12
A <sub>2</sub>	6		
B <sub>1</sub>	5	25	14
B <sub>2</sub>	8		
B <sub>3</sub>	6		
B <sub>4</sub>	6		
C <sub>1</sub>	2	7	13
C <sub>2</sub>	5		

TABLE 4  
DISTRIBUTION BY SAMPLE OF INFANTS AMONG  
STRANGE-SITUATION SUBGROUPS

subgroup	Samples				Total	
	1	2	3	4	N	%
A <sub>1</sub>	4	3	2	3	12	11
A <sub>2</sub>	2	2	5	1	10	9
A <sub>0</sub> <sup>a</sup>	0	0	0	1	1	1
B <sub>1</sub>	1	3	1	5	10	9
B <sub>2</sub>	3	4	4	0	11	10
B <sub>3</sub>	9	14	8	14	45	42
B <sub>4</sub>	0	3	1	0	4	4
C <sub>1</sub>	2	2	1	1	6	6
C <sub>2</sub>	2	2	1	2	7	7
Totals	23	33	23	27	106	

<sup>a</sup>This indicates Group A, but unclassified as to subgroup.  
from Ainsworth et al. 1978. p. 236

TABLE 5  
STRANGE SITUATION CLASSIFICATIONS (N=50)

Subgroup	N	%
A <sub>1</sub>	4	8
A <sub>2</sub>	6	12
B <sub>1</sub>	3	6
B <sub>2</sub>	9	18
B <sub>3</sub>	11	22
B <sub>4</sub>	7	14
C <sub>1</sub>	4	8
C <sub>2</sub>	6	12

from Waters 1978. p. 490

1. A, B, C の出現頻度

strange situation における A, B, C および subgroup の出現頻度についてみたのが TABLE 3 である。41 名中 2 名のもは、子どもの状態が悪いため分析対象から除いてある。TABLE 4 は、Ainsworth, Bell, Main の結果における各出現頻度およびパーセントを示し、TABLE 5 は Waters の結果の各出現頻度およびパーセントを示している。

母親に対して avoidant な関係を形成している子どもは、本研究では18%、Ainsworth らでは20%、Waters では 20%である。母親に対して安定した愛着を形成しているものは、本研究では46%、Ainsworth らでは66%、Waters では60%である。母親に対して ambivalent な愛着を形成しているものは、本研究では 18%、Ainsworth らでは13%、Waters では20%である。いずれの研究においても、A, B, C の出現率はほぼ同じような傾向を示している。しかしながら、安定した愛着を形成しているものについて、その subgroup の出現率を見た場合には研究によりかなり強った比率を示している。特に、より安定した愛着を母親に対して形成していることを示す B<sub>2</sub>, B<sub>3</sub> の出現率に大きな差異が認められる。すなわち、本研究では、B<sub>2</sub>: 21%, B<sub>3</sub>: 15%, 計36%であり、Ainsworth らでは、B<sub>2</sub>: 10%, B<sub>3</sub>: 42%, 計52%であり、Waters では、B<sub>2</sub>: 18%, B<sub>3</sub>: 22%, 計40%である。本研究での被験者と Ainsworth らの被験者との間に大きな差異が認められる。

TABLE 3 の右端の regrouping は Connell の分類に基づいて再分類したものの頻度を示している。彼は、46組の母子を対象として、Ainsworth らの分類基準に

基づいて分類した後、各 subgroup について cluster analysis を行い、subgroup B<sub>1</sub> に分類されるものは、他の subgroup のものよりも group A と類似した行動を示すことを見いだしている。また subgroup B<sub>4</sub> についても、行動的には group C に分類されるものと類似した行動を示すことを見いだしている。そこで彼は、group A と subgroup B<sub>1</sub> を同一 group とし、group C と subgroup B<sub>4</sub> を同一の group に分類した方が、母親に対して安定した愛着を形成しているものとそうでないものとの差異がより明確になると指摘している。本研究では、Ainsworth らの分類基準による分類を group A, B, C と表示し、Connell の分類によるものを regroup 1 (group A と subgroup B<sub>1</sub> を含む)、regroup 2 (Subgroup B<sub>2</sub>, B<sub>3</sub> を含む)、regroup 3 (subgroup B<sub>4</sub>, group C を含む) と表示する。

## 2. 愛着の質的差異と養育環境

仮説 1 で、家庭における物理的・社会的環境は、愛着の形成、特にその質的面との関連性が高いであろうことが仮定された。しかし TABLE 6 に示されるように、

いずれの group の得点も高く、かつ類似した傾向を示し、全く有意差は見いだされない。

## 3. 愛着の質的差異とコンピテンス

コンピテンスの測度として用いた Bell and Pairs テスト得点は、子どもが母親に対して形成している愛着のいかににより異なるであろうと仮定されたが、TABLE 7 に示されるように、group 間には有意差は見いだされない。

しかし、Bell テストにおいても Pairs テストにおいても、group C および regroup 3 に分類されるものの得点は、他の group に比較して、かなり低い傾向が認められる。

## 4. 愛着の質的差異と母親の養育態度

TABLE 8 に示されるように、尺度 1 (Sensitivity-Insensitivity)、尺度 2 (Acceptance-Rejection)、尺度 3 (Cooperation-Intefrence) には group 間における得点には有意差は認められない。しかし、尺度 4 (Accessibility-Ignoring and Neglecting) は、regroup 間に有意差が認められる。Student-Newman-Keuls テストの結果では、

TABLE 6  
ATTACHMENT CLASSIFICATION AND HOME SCORES (N=39)

HOME Score	Attachment Classification					Regrouping				
	Subscal	A	Group $\bar{X}$ B	C	Probability	1	Group $\bar{X}$ 2	3	Probability	
1	11	10.8	10.7	.59	.56	10.9	10.8	10.7	.28	.76
2	6.6	6.1	6.6	.32	.73	6.3	6.1	6.4	.08	.93
3	5.6	5.6	5.4	.11	.90	5.5	5.6	5.5	.03	.98
4	8.8	8.5	8.7	.56	.57	8.8	8.4	8.6	.86	.43
5	5.7	5.8	5.7	.03	.97	5.7	5.9	5.6	1.1	.35
6	3.7	3.4	2.7	.99	.38	3.7	3.6	2.7	2.2	.12
Total	41.4	40.1	40.0	.38	.68	40.9	40.4	39.7	.35	.70

TABLE 7  
ATTACHMENT CLASSIFICATION, BELK AND PARIS SCORES (N=39)

Test	Attachment Group Mean			F	Probability	Regroup Mean			F	Probability
	A	B	C			1	2	3		
Bell	455	463	406	.43	.65	482	478	396	1.6	.23
Pairs	390	328	308	1.3	.28	353	341	313	.49	.62

TABLE 8  
ATTACHMENT CLASSIFICATION MEAN AINSWORTH SCALE SCORES (N=39)

Scale	Attachment Group $\bar{X}$			F	Probability	Regroup $\bar{X}$			F	Probability
	A	B	C			1	2	3		
1	8.7	8.1	8.1	.43	.65	8.3	8.6	7.7	1.0	.37
2	9.0	8.4	8.4	.65	.53	8.7	8.8	8.0	1.7	.20
3	7.8	7.4	7.8	.33	.72	7.5	7.6	7.6	.02	.98
4	8.7	8.2	7.6	1.7	.20	8.5	8.6	7.5	4.2	.02*

TABLE 9  
SUBGROUP MEANS ON SCALES OF MATERNAL BEHAVIOR IN THE FOURTH QUARTER (SAMPLE 1)

Maternal Behavior	Strange-Situation Subgroups					
	$B_3$	$B_1/B_2$	$C_1$	$C_2$	$A_2$	$A_1$
Sensitivity-insensitivity	7.36	4.50	2.50	2.25	2.50	2.75
Acceptance-rejection	8.00	6.75	5.50	5.25	4.25	3.50
Cooperation-interference	7.66	6.50	4.00	4.50	5.50	2.63
Accessibility-ignoring	7.39	4.88	4.50	2.50	2.25	4.63
Mean Scores	7.60	5.66	4.13	3.65	3.63	3.38

form Ainsworth et al. 1978. p. 237

TABLE 10  
DEMOGRAPHIC ITEMS AND ATTACHMENT CLASSIFICATION  
(N=39)

	Regroup $\bar{X}$			F
	1	2	3	
Number of siblings	.33	.43	.85	3.5*
Peer experience	3.5	4.5	4.9	6.7**

\* $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$

regroup 1 と 2 の間には有意差は見だされない。つまり、この結果は regroup 3 に分類される子どもを持つ母親は、他の group の母親に比較して子どもからの働きかけを無視する傾向が高く、母親の関心は自分自身の興味の方に向いている傾向があることを示している。

TABLE 9 は、Ainsworth らの結果<sup>12)</sup>である。すべての尺度において、安定した愛着を形成しているものと形成していないものとの間に明確な差異を示している。そして安定した愛着を形成している子どもの母親はいずれの尺度でも高い得点を示している。本結果では、いずれ

の group 得点も Ainsworth らの結果よりも高い得点を示している。特に、A、C の得点が高くなっている。

#### 5. 愛着の質的差異と家庭状況

group 間に有意差が見いだされた項目を TABLE 10 に示してある。これらの項目は、regroup においてのみ差が見いだされたものである。

きょうだい数について、Student-Newman-Keulo テストをしたところ、regroup 1 と 2 の間には有意差は認められない。つまり、この結果は、regroup 3 に分類される子どもは、他の group に分類される子どもよりも多くのきょうだいをもっていることを示している。

また、友達と遊ぶ経験についても group 間に有意差が認められる。ここでは、友達と遊ぶ経験に関してつぎのような数量化を行なっている。

5 : ほとんど毎日友達と遊ぶ

4 : 1 週間に数回友達と遊ぶ

3 : 1 週間に 1 回友達と遊ぶ

2 : 1 ヶ月に数回友達と遊ぶ

1 : 友達と遊ぶ機会はほとんどないまたは全くない

Student-Newman-Kauls テストの結果によると、re-

group 2 と 3 の間には有意差は認められない。つまり、この結果は、regroup 1 に分類される子どもは他の group の子どもと比較して、友達と遊ぶ機会が少ないことを示している。

## 討 論

本研究で対象とした1才児が、母親に対してどのような愛着を形成しているかを見た場合、Ainsworth らおよび Waters の結果と非常に類似した傾向が見いだされる。しかしながら、subgroup の出現率についてみると、研究によりかなり異なっている。つまり、この差異は、それぞれの研究が対象としている被験児そのものの特性差を示しているものと思われる。Ainsworth らの分類基準に基づいて、group 化を行なった場合には、このような subgroup における差異は捨象されてしまうが、Connell の分類基準に基づく分類の場合には、このような差異をより鮮明にとらえることができるものと考えられる。その意味で、Connell の分類は大きな意味をもつものといえよう。

### 愛着の質的差異と養育環境

両測度間に仮定された関連は、本研究では全く確認されていない。仮定の段階では、subscale 1 (Emotional and Verbal Responsivity of Mother), subscale 2 (Avoidance of Restriction and Punishment), subscale 5 (Maternal Involvement with Child) の得点が、各 group 間で差異を示すであろうと考えられた。しかし、TABLE 6 に示されるように、いずれの subscale の得点も高く、group 間には有意な差は見いだされていない。

これは、仮定に反して HOME の尺度は、子どもが母親に対して安定した愛着を形成するために必要な環境要因とは、全く無関係な要因で構成されていると考えるべきなのであろうか。

確かに、HOME の項目の中には、与えられる玩具の種類、ペットの有無、父親や親戚との関係、病院やお店に連れて行ってもらえる機会など、子どもに与えられる多種多様な社会的・物理的刺激的の有無について見る項目が多く含まれている。これらの項目は、必ずしも子どもが母親に対して形成する愛着の質とは、直接的な関連をもたないであろうことは考えられる。しかしながら、この尺度の中には subscale 1 と 5 のように明らかに母と子の関係についてみる尺度も含まれている。

Ainsworth は安定した愛着の形成と Ainsworth 評定

尺度で測られる母親の養育態度が、非常に高い関連のあることを指摘しており、本研究では前報に示したように、HOME と Ainsworth 評定尺度の間に非常に多くの相関が見いだされている。特に、Subscale 2, 5, 6 (Opportunities for Variety in Daily Stimulation) は、Ainsworth 評定尺度のすべての尺度との間に有意な相関が見いだされている。このようなことから考えるならば、当然、HOME と愛着の質的面との間にも有意な関係が仮定される。にもかかわらず、いずれの group の母親も高い得点を示し、group 間の差を見ることができなかった理由として別のことが考えられる。

高橋ら<sup>17)</sup>は、HOME は SES の低いものには有効な尺度であるが、それ以外の SES のものにとっては尺度としての有効性を著しく欠くことを指摘しているが、本研究で対象としているものの SES はほぼ中に属する。各 group 間に差異が見いだされなかった原因は、高橋らが指摘するように HOME そのものもつ尺度としての有効性そのものによるのであろうか。

あるいはまた、Coldwell らが指摘するように、HOME は母子間に愛着を形成するために必要なチャンスの有無について見るものであって、愛着の質について測るものではないのであろうか。

これらの疑問に関しては、ここでは充分に答えることができない。種々な要因を統制して行なわれる研究の中で、明らかにされるべき問題と思われる。

### 愛着の質的差異とコンピテンス

TABLE 7 に見られるように、両測度の間には統計的に有意な差は見いだされていない。しかし、子どもが母親に対して形成する愛着の質的差異により、先に仮定されたような関係は認められる。すなわち、探索行動の活発さの程度を測る Bell テストの得点は、A と B および regroup 1 と 2 が類似しており、これらの得点は、C および regroup 3 に比較して高い傾向を示している。これは、C および regroup 3 に分類される子どもすなわち母親に対して ambivalent な愛着を形成しているものは、他の group に分類される子どもよりも、低い探索行動を示す傾向にあることを示唆している。Connell は、ambivalent な愛着をもつ子どもが、余り積極的な探索行動を示さないのは、新しい状況に対して非常に用心深く、その用心深さが新しい状況への探索行動を抑制してしまう結果であると指摘している。また Rubenstein は、子どもの探索行動の活発さの程度は、maternal atten-

tiueness と関連があることを見いだしている。つまり、子どもに対して視覚的な関心を多くはらい、子どもとの身体的接触が多く、かつ言語的 communication の多い母親の子どもは、探索行動が活発であることを見いだしている。この maternal attentiveness は、安定した愛着の形成に深いかかわりをもつ尺度であることは Ainsworth らによって明らかにされている。そこで、Rubenstein の結果は、活発な探索行動を示す子どもは、母親との間に安定した愛着を形成しているといいかえることも可能となる。本研究では有意な差が認められなかったけれども、この Bell テストの結果は、Connell および Rubenstein の結果にはほぼ一致するものといえよう。

Bell テストにおいて見いだされた傾向は、新奇刺激に対する興味・関心をみる Pairs テストにおいても認められる。Bell テストの結果との違いは、A と B の差が大きく、逆に B と C の差が小さいということである。つまり、A に分類される子どもすなわち、母親を avoid する子どもは、子どもにとって familiyer な刺激よりも新奇性の強い刺激である novel object に対してより強い興味・関心を示す。そして、この novel object に対する興味・関心は、他の group の子ども達に比較して大きい傾向が認められる。

Connell は、母親を avoid する子どもは、新奇な刺激に対し低い habituation を示し、母親に安定した愛着を形成している子どもは、新奇な刺激に対して高い habituation を示すことを見だし、本結果とは全く逆の結果を示している。また、彼は、母親に対して ambivalent な愛着を形成している子どもは、安定した愛着を形成している子どもに比較して、新奇な刺激への興味・関心は低いとしているが、これは、本結果ともほぼ一致するものであると思われる。

いずれにしても、両測度間に統計的に有意な関係が見いだされなかった理由として、つぎのことが考えられる。

まず、コンピテンスの測度の問題が指摘される。Rubenstein は 6～8 ヶ月児について、Bell and Pairs テストの有効性が非常に高いことを見いだしているが、本研究で対象とした 12 ヶ月児の多くは、いずれも高い得点を示し、テストとしての弁別力を著しく減少させている。

つぎに、両測度の時系列的問題が考えられる。本研究は、数年に亘る縦断的研究を意図して計画された第一段階に相当するため、測度間の比較の中に時系列的視点を導入できなかった。しかしながら、両測度の関係は、共

起関係にあると考えるよりも、むしろ Main, Mates ら及び Lieberman が指摘するように、ある時間的ずれをもった関係としてとらえることが適切であると考えられる。この件に関しては、今後の継続研究の中で検討して行く予定である。

つぎに、子ども自身の問題が考えられる。すなわち、A に分類された子どもは、本当に母親を avoid している子どもであるかという問題である。Ainsworth らの分類基準に示される A の行動は、母親を avoid する結果、示されるものであると考えられているが、本研究で対象とした 1 才児の strange situation における行動を観察する限り、母親を avoid しているというよりもむしろ、母親からすでに自立している子どもという印象が与えられる。この子ども達が、母子分離の状況におかれても、余り混乱に陥らないのは、子どもは日常の生活体験を通して、母親が長い時間に亘って子どもを放っておくことがないことを理解しているためと考えられまいであろうか。もし、このような信頼関係が、子どもの側に成立しているならば、strange situation のような短い母子分離状況で、混乱を呈すこともないであろうし、また、母親との再会場面でも、母親と直接的な身体的接触によらなくとも、母親が再入室して来たことを知るだけで、充分に安心感を得、子ども自身の活動を継続できたのではなかろうか。このように考えればこの子ども達は、興味・関心の対象が母親から物へと移行・拡大したのであって、行動的には A に分類される特徴を示すであろうが、本質的には B に分類されるべき子ども達である。このように心理的に異なった母子関係にある子どもが、A に分類されているために安定した愛着を形成しているものとの差異が不明確になったものとも考えられる。しかしながら、新しい問題として、12 ヶ月時という発達の非常に早い時期に示されるこのような母親からの自立が、子どもの他の面の発達とどのように関連するかについて考えてみる必要がある。この点に関して追跡研究の中で検討して行きたいと考えている。

#### 愛着の質的差異と母親の養育態度

TABLE 8 と 9 に示されている本研究結果と Ainsworth らの結果は、非常に異なっている。Ainsworth らの結果では、安定した愛着を形成している子どもの母親はすべての尺度で高い得点を示しているのに対して、本研究では、尺度 4 以外の尺度では、いずれの group の得点も高く、非常に類似した傾向を示し、得点の高い順

位についても、母親を avoid している子どもの母親の方が、すべての尺度で第1位を占めている。

このような Ainsworth らの結果との差異は何に原因するのであろうか。ここでは、HOME で示唆されたような SES の問題は考えられない。すなわち、Ainsworth の被験者は、Baltimore に在住する米国人 (White) で Middle-Class に属するものであり、本研究の被験者は、Austin に在住する米国人 (White) で Middle-Class に属するものである。むしろ、これは研究方法の問題、特に、母親の行動評定手続の差異が指摘されよう。

Ainsworth らは、長期に亘り、度重なる家庭訪問によって、母親の行動を観察し、評定しているのに対して、本研究では、1回のみを観察であり、その時間も約2時間と非常に短い時間の行動観察に基づいて、母親の行動評定を行なっている。この観察時間の短さということが、得点の凝集化現象を生じさせていると考えられる。

もちろん、ここでも愛着とコンピテンスのところで指摘したAに分類された子どもそのものが持つ問題も考えられる。

以上、12ヶ月時における愛着の質的差異と環境要因・母親の養育態度・コンピテンスとの関係について検討して来たが、ここでは明確な関係は見いだされていない。その理由としては、先に述べたように測度の問題、時系列的視点の問題などが考えられる。これらの件に関しては、今後の継続研究の中で改めて検討すべき問題と思われる。

本研究において試みたような social-emotional な面の発達(愛着)と cognitive な面の発達(コンピテンス)の関連を見いだそうとする研究は、子どもを holistic organism としてとらえようとする時に非常に大切なものであると同時に、子ども理解を単に量や比率のレベルで終わらせずに質的面からの理解を促すためにも大切なものであると考える。

### 要 約

前報に引き続き、子どもがどのような愛着を母親に対して形成しているかにより、子どもを avoidant baby secure baby, ambivalent baby に分け、これらと養育環境、コンピテンス、母親の養育態度および家庭状況との関連について検討した。被験者は、米国人の12ヶ月児41名とその母親である。測度としては、Strange Situation, HOME, Bell and Pairs テスト, Ainsworth 評定

尺度および家庭状況調査等を使用した。その結果、愛着の質的差異と各測度間には、余り有意な関係は認められなかった。これは測度の問題および分析の視点として時系列的観点を挿入できなかったことに原因するものと思われる。これらの問題については、追跡研究の中で新たに検討して行く予定である。

<付記>本研究は、在外研修員としてテキサス大学家政学部児童学科に滞在した際の研究成果の一部をまとめたものである。本研究を行なうにあたって、いろいろご指導、ご援助をいただいたテキサス大学教授 Dr. Durrett, Dr. Hull, 院生の Mrs. Moss, Mrs. Means, そして研究にご協力いただいた41組の母子の皆様、研修の機会を与えて下さいました東京家政大学の諸先生に心から感謝を申し上げます。なお、本報告は日本教育心理学会第23回総会(1981年8月)の発表論文に一部加筆したものである。

### 文 献

- 1) A. Lieberman : New Vistas on Attachment : Three Recent Contributions. Merrill-Palmer Quarterly, 24, 279—292 (1978)
- 2) A. L. Sroufe and E. Waters : Attachment as an Organizational Construct. Child Development, 48, 1184—1199 (1977)
- 3) B. Caldwell, J. Heider, and B. Kaplan : Home Observation for Measurement of the Environment. Paper presented at the Meeting of the American Psychological Association, New York, September, 1966.
- 4) D. B. Connell : Individual Differences in Infant Attachment Behavior : Relations to Response to Redundant and Novel Stimuli. Unpublished Masters Thesis, Syracuse University, 1974.
- 5) E. Waters : The Reliability and Stability of Individual Differences in Infant-Mother Attachment. Child Development, 49, 483—494 (1978)
- 6) J. Rubenstein : Maternal Attentiveness and Subsequent Exploratory Behavior in the Infant. Child Development, 38, 1089—1100 (1967)
- 7) L. Matas, R. Arend, and A. Sroufe : Continuity of Adaptation in the Second Year : The Relation between Quality of Attachment and Later Com-

- petence. *Child Development*, **49**, 547—556 (1978)
- 8) M. Blehar : Anxious Attachment and Defensive Reactions Associated with Day Care. *Child Development*, **45**, 683—692 (1974)
- 9) M. D. S. Ainsworth : Infancy in Uganda : Infant Care and the Growth of Love. Baltimore : Johns Hopkins Press, 1972.
- 10) M. D. S. Ainsworth, and S. M. Bell : Mother-Infant Interaction and the Development of Competence. In K. Connolly and J. Bruner (Eds.), *The Growth of Competence*. New York : Academic Press, 1974
- 11) M. D. S. Ainsworth, S. M. Bell, and D. J. Stayon : Individual Differences in the Strange Situation Behavior of One Year Olds. In H. R. Schaffer (Ed.), *The Origins of Human Social Relations*. London : Academic Press, 1971
- 12) M. D. S. Ainsworth, M. C. Blehar, E. Waters, and S. Wall ; *Patterns of Attachment : A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Assoc., 1978
- 13) M. D. S. Ainsworth, and B. S. Witting : Attachment and Exploratory Behavior of One-year-olds in a Strange Situation. In B. M. Foss (Ed.), *Determinants of Infant Behavior, IV*. London : Methuen, 1969.
- 14) M. Main : Exploration, Play, and Cognitive Functioning as Related to Child-Mother Attachment, Unpublished Doctoral Dissertation, Johns Hopkins University, 1973
- 15) 大瀧ミドリ : 愛着・コンピテンス・母子関係—理論的概観, 東京家政大学研究紀要, 第**20**集(1), 11—21 (1980)
- 16) 大瀧ミドリ : 乳児期の養育環境とコンピテンスについて, 東京家政大学研究紀要, 第**21**集(1), 19—28 (1981)
- 17) 高橋恵子, 波多野誼余夫 : 乳児期の家庭環境と3才時の知的発達. 日本教育心理学会第**21**回総会発表論文集, 466—467 (1979)
-